

渡辺恒夫・高石恭子編
『〈私〉という謎——自我体験の心理学』
(新曜社・二〇〇四年五月)

高石 恭子



「私とは何か」「なぜ私はこの私なのか」といった問いは、おそらくヒトだけが問う意識の難問である。古来、哲学者や偉大な宗教者はこれらの問いをさまざまに沈思し、瞑想し、解こうと試みてきた。

一方、アカデミックな心理学は、ヒトのこころを扱う学問でありながら、物理学をモデルに誕生した時代のいきさつゆえ、完全には対象化し得ない「私」というものを極力排除し、自然科学的な実証主義を踏襲しようとしてきた。「私が私でなくなる」病理を解明する、精神医学からの症例示や論考は積み上げられても、ふつうの人々が、成長の過程で、このような問いをいつ頃、どんなふうに関心、どうやってそこから抜け出していくか、という心理的過程の解明は、手付かずのまま一世紀以上が過ぎてしまったわけである。

「私とは何か」を問い、現実にとぐつた自分なりの一応の結論を出して大人になっていくプロセスは、「アイデンティティの確立」と、E・H・エリクソンの概念を用いて理解することもできる。しかしながら、エリクソンの言うアイデンティティとは、社会との関係において自己の役割を決定していくという、心理・社会的枠組を重視した概念であり、そのような自己形成に先立つ、もっと内発的で、存在論的な問いを契機にした自己形成の時期を扱うのに最適とは言えない。

本書のコーディネーターであり、実質上の編者である渡辺恒夫氏は、科学基礎論を専門とし、東邦大学理学部で心理学を教えるかたわら、『輪廻転生を考える』（講談社現代新書）、『〈私の死〉の謎』（ナカニシヤ出版）、『心理学の哲学』（共編、北大路書房）などの哲学的な論考も多数発表している学際的な研究者である。彼は、この「私とは何か」という存在論的な問いを問う経験を、近年台頭してきた生涯発達心理学の枠組で扱い、体系化することはできないかと考え、その一つの足がかりとして、一九九九年に発達心理学会でシンポジウムを行なった。本書は、そのときの成果をもとに編まれた論文集である。

本書の構成は、三部から成る。「第I部 〈私〉の謎というはてなき旅へ」では、思春期の実存的な問いの体験や自我の質的・構造的変化の体験を「自我体験」と名づけて分析したオーストリアの心理学者、シャロツテ・ビュラーの研究をわが国に紹介した臨床心理学者、西村洲衛男氏と、わが国の児童・青年を対象に調査研究した高石の論考が配されている。

る。「第Ⅱ部 深まりゆき多岐化する〈私〉の謎」では、架空のネット掲示板で、現代の青年たちがどのようにこの問いを語り得るかがシミュレートされ、さらに霊長類学を専門とする金沢創氏によって、独我論的体験と自我体験との連関が考察される。「第Ⅲ部 紙上シンポジウム〈私〉の謎の心理学」では、前述の学会シンポジウムでのメンバー（渡辺恒夫、天谷祐子、小松栄一）が、その後の自我体験研究の進展も踏まえて各人の主張を展開するとともに、発達心理学の専門の立場から、高井弘弥氏がコメントをするという形で締めくくられている。

そのコメントを読む限り、発達心理学という領域においても、まだまだ従来の実証的・客観的パラダイムが優勢であり、「私とは何か」を問うような主観的体験を研究の俎上に載せることの難しさが見えてくる。しかしながら、私が「私」をどのように主観的に経験し、記憶し、意味づけるかが、どれほど私たちの自己形成と外的世界への適応にとって大きな位置を占めるかは、臨床心理学を学び、実際に自己の不確実感に悩む人と日々出会っている者には自明のことからであろう。

「私とは何か」という壮大で深遠な問題は、とても一つの専門領域や、一つの研究で、何かが明らかになるようなものではない。かといって、細分化され、断片化された「客観的で」「安全な」材料ばかりを対象にしているのは、心理学はやがて抽象的な論理を扱うアカデミックな心理学と、実践主体のプロフェッショナルな心理学へ二極分裂し、必ず人々の関心を失っていくだろう。本書は、その二つの方向をどのように結

びつけ、主観的体験を心理学でどう研究できるか、に挑戦する人には是非参考にしていただきたい一冊である。

（たかいし きょうこ・臨床心理学）